

シュレーダー邸 1924年 ヘリット・トーマス・リートフェルト

可変間仕切りのある住空間

表現主義が隆盛した1910年代、オランダでは抽象性と幾何学を重視し、誰にも理解される客観的な造形を目指す運動が画家、建築家から起こり、「デ・スタイル」と呼ばれた。シュレーダー邸はその代表作とされる。

設計者のリートフェルトは家具製造業の父の下で修業して夜学で建築を学び、デ・スタイルの一員になっていた。建主は弁護士・シュレーダー氏の夫人・トゥルースである。夫が死亡した時、小学生の息子と二人の娘を抱え、思いあぐね、以前、古い部屋の内装替えを任せたりトフェルトに相談した。その結果、邸宅を引き払い、ユトレヒト市の外縁部に土地を探して建てたのがこの住宅である。

西側は既存アパートの妻壁に密着させ、他の3方は練瓦組積の構造壁を分散配置し、内部中央付近の煙道壁とで7m×10mの2階と屋根の木造床を支えている。開口部では床を伸ばしてバルコニーと庇を突き出し、居間・食堂の出隅回りは鉄骨柱を使い、方立なしで直角に窓を組み合わせ、開くと出隅は開放される。装飾や古い様式が一切ない平面要素での構成がイズムの具現化だろう。

特色は、2階の主たる生活空間に可変性を持たせたことだ。階段、暖炉を核に、居間・食堂と3寝室を配置し、それを天井までの引き戸で仕切り、時には回遊性と広がりのある一室空間に変換可能にしたのだ。もう一つは全室を賃貸可能にするため給排水管と洗面器を備え、1階では各室に外へのドアを付けたことだ。いずれも夫人の要望による。

壁、天井は無彩色だが、床の一部には赤を使い、それと収納、家具の一部に原色を塗り、空間に活気を与えている。

1階では、書斎、玄関、厨房、メイド室をガラスの欄間付きの壁で仕切り、天井が繋がりが狭さを感じさせない。

用具小物入れが各所に巧妙に仕込まれ、食材、廚芥の搬出入を考慮し厨房は1階だが2階への搬送に手動綱引き昇降器を装備し、階段上には採光と屋上への出入りのためガラスのボックスを設けるなど、随所に創意工夫があり驚く。

道路から回り込んだ側に小さな玄関を設け、階段を上ると一室空間が広がる構成はロビー邸と同様で、外観がどうあれ、影響が想像される。リートフェルトはライトの作品集（ヴァスマート社1910年）をこよなく見ていた。

もう一つは日本の影響だ。一室空間への可変性の発想には日本家屋のプランと引戸の知識が寄与しただろう。

こうみるとイズムの代表作と言うよりも生活要求と必要性から発想し、それを無装飾の構成要素で自由に造る可能性を拓いたことが重要で、そこに歴史的価値があると思う。

「この住宅は楽しさと喜びがあふれている」と述懐した夫人は亡くなる1985年までの61年間、ここに住み続けた。



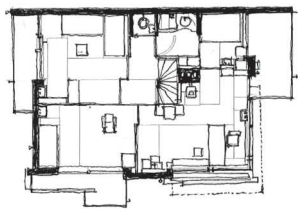
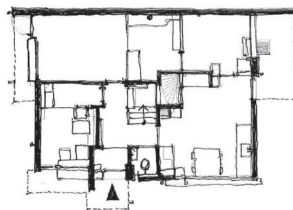
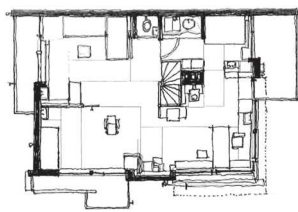
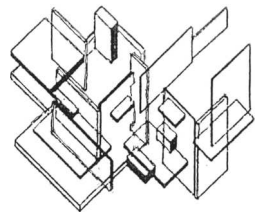
南東側外観 左側に街路がある。右上、居間・食堂



2階の居間・食堂 右側2本の黒い柱は鉄骨柱



2階居間・食堂 窓左手に昇降器 1階厨房 人研流しと吊り戸棚



(左上)ドースプルフのコンポジション (右上)2階平面図(可動間仕切り開放時)
(左下)1階平面図 (右下)2階平面図(可動間仕切り閉鎖時)